

新たな世界への第一歩—英国研修に参加して—

立命館大学 文学部 人文総合科学インスティテュート
国際プログラム 2回生 宮川結妃

私は、この夏 PENinternational2010 のプログラムに参加をして、聾者の世界に触れ、新たな自分を発見することができた。

この研修プログラムは、イギリスの Herstmonceux 城で 8 月 19 日から 29 日の 11 日間にわたって行われ、アメリカ、ロシア、フィリピン、中国、日本の 5 カ国が集まって研修を受けた。

日本チームは、成田空港から北京を経由してヒュースロー空港へと向かった。ヒュースロー空港へ着いたのち、DeCaro 夫妻が出迎えてくれ、ASL は分からぬが、笑顔を絶やさないことや話し手が聞き返した時に嫌がらず分かりやすくゆっくりと伝える姿勢がみられたことから親切な方だと言う事が伝わってきて、安心できた。この空港でフィリピンチーム、中国チームと合流し、城の宿泊施設へと向かった。宿泊施設の部屋に入って想像していた以上に部屋が広く、テーブルやタンスが設備されていることに驚いた。

翌日、アメリカチームとロシアチームが到着し、現地時間 22 日に研修初日を迎えた。各国のチームと PEN の職員さん、リーダーが会議室に集まったとき、まだ交流がなかったために本当にこんな私がこの場に居て大丈夫だろうかと不安を抱え、緊張していたのを今でも覚えている。

まず、この研修におけるスケジュールや最終ゴールなどのイントロダクションがあり、昼食を挟んでから城内ツアーが行われた。城内ツアーでは、2 つのチームに分かれ、私達日本チームは Bill さんのガイドの下で城内を見て回ることになった。波瀾万丈な城の変遷から、幽霊の話まで盛りだくさんでこのツアーで緊張感が和らいだように思う。

次に、SpeedDating といって、国や性別関係なく 1 対 1 であらかじめ用意された質問を参考に話すという Ice-Breaking をした。質問の内容として、居住地、大学名、好きなもの、好きな音楽、映画、テレビ、2020 年の夢が挙げられ、ASL や筆談、口話など自分が得意とするコミュニケーション方法でお互い質問し合い、お互いのことを知る機会になった。私は日本手話しか分からぬためにほとんど筆談とジェスチャーで会話をし、相手も自国の手話で伝わらなかったら筆談やジェスチャーをしてくれたので、コミュニケーションに困ることはなかった。この Ice-Breaking で気付いたことは、皆障害を気にせずに自分の好きなこと、やりたいことをしているということである。また、私の好きなものに共感してくれる人ばかりで、ボーダーラインはないと感じた。今まであまり話していなかった人とも話せて良い機会になって良かった。その後夕食を終えてから、研修最初のプレゼンテーションがあり、日本チームは高田英一さんについて紹介した。トップバッターのフィリピンは、MARIA LOVELLA M.CATALAN という聾の女性アスリートの紹介があった。彼女は、健聴のコミュニティでお互いに平等であるというビジョンのもと、積極的にコミュニティやボランティアに参加し、自分の好きなスポーツをしながら聾者のための活動を行っている。次に、ロシアのプレゼンでは Nikolao A.Buslaev と Karp A.Milaelyan の 2 人のリーダーの紹介があった。前者は、詩

人で14歳の時に病気で聴力を失い、Joseph Stalin に手話が aural language と平等であることを認めさせた。さらに、聾の子どもたちのための学校を設立した。後者は、前者と同じく聾者のための特別支援学校を設立し、この学校には18人の通訳者がいる。彼は、聾の子どものために自分の人生を捧げることをモットーとして活動を行っている。彼のように自分の人生を犠牲にしても良いという強い覚悟を持つことはなかなか出来ないが、本当に今の社会を変えたいなら生半可な気持ちで行動するのではなく、強い覚悟を持たなければいけないと思った。そして、アメリカは教育、文化、言語の面における3人のリーダーの紹介があった。1人目は、Laurent Clerc というフランス人のデフリーダー。この人は、教育面において貢献をした人で、聾者のための教育、健聴者を対象にした聾者についての教育をビジョンとしている。2人目は、George Veditz というアメリカ人のデフリーダーで、聾文化と手話を守ることとフィルムで聾者の文化と言語を保護するというビジョンのもと、文化面において貢献をした。3人目は、William Stokoe というアメリカ人の健聴のリーダー。彼は、ASL の父と呼ばれており、なにがあっても諦めない姿勢を維持しながら手話は言語であると証明し、口話教育を見直させた。最後に中国は女性ダンサー達の紹介があった。彼女達は中国の有名な選手観音というダンスグループに所属し、自分を表すためのものとしてダンスをやっている。私は、以前健聴の友達にダンスに誘われダンス教室の体験に行ったことがある。そこでは私以外健聴のため、声で指導されていて、ついていけずダンスを習うことを諦めた。今までの私は障害を気にしてばかりで、出来ないことや上手く行かないことがあったらすぐに障害のせいにしていた。しかし、この中国のプレゼンで自分の考えが変わって良かったと思う。

次の日から先生による講義がはじまり、ASL から英語の音声通訳、各国の言語に合わせた音声通訳、手話通訳という流れで進められた。

どの講義も素晴らしい刺激のあるものばかりだったが、中でも印象に残っているものをいくつか挙げていきたいと思う。

一つ目に、良いリーダーシップとは何かについて考えるワークショップで、自分たちが選ぶTOP5 が自分の国の文化を反映しているということにとても納得させられ、新しい知識を身につけることができた。各国のチームが選ぶTOP5 はそれぞれ異なり、文化に結びつけてのプレゼンは興味深く聞くことができた。二つ目に、各国における聾者に関する問題についてのプレゼンで、こんなにも国によって起こっている問題は異なるのかと衝撃を受けた。フィリピンではお金がないためにテレビにテロップがつかないという問題、中国では企業が喋れる人を求めていたため働く機会が減り、なかなか雇用が安定しないという問題、ロシアでは手話通訳者の数が足りないという問題、大学に入る際必要な設備がないために入学を断られ、学位がとれないために就職が難しいという悪循環を引き起こしている。アメリカでは、歳をとってから聞こえなくなった高齢者の支援問題。歳をとってから聞こえなくなった為に手話を知らない人が多いのにもかかわらず、支援がない。日本で起きている問題と共にするものもあるが、日本の方が恵まれていると感じるものもあり、各国における支援事情の違いを学んだ。最後に、やはりグループアクティビティが印象強い。国を問わずランダムにグループを4つ作り、城の外に宝物を探しにいくというグループワークやアリゲーター・リバーのお話に基づく川

をグループ全員が渡るというグループワーク、人間トレースなどをグループ内で行った。これらの研修を終えて、私が学んだことは、グループワークの大切さ、そして良いグループから生まれる最高のチームワーク、ジェスチャーは世界共通の言語であること、異文化理解の重要性、リーダーシップについて、ゴールを設定することで生まれる新たな夢、気付かないうちに自分の中にあったロールモデル（子どもの時のぬいぐるみが最初の友達である）などである。一つの研修プログラムでこんなにも多くのことを学べるとは正直思っていなかった。また、手話通訳者のもたらした影響も強い。私は、普段ノートテイクを利用しているため、手話通訳を目にし、さらに自分が利用するのはこの研修が初めてだった。彼女達は、手話通訳が追いつかない時に何度も怖じ気づかないで高々と拳を挙げ（待ってほしいという意味）、発言者に質問や確認をしていた。私は普段、分からぬ事があった時にそのままにしてしまう癖があるので、彼女達の姿を見て堂々と聞く姿勢を身につけるようにならなければいけないと思った。

それから、研修中に先生からもアドバイスや注意を受けることがあり、そのアドバイスは先生が聾者であるから考えられるのだろうというものの聾者のリーダーとして経験を積んできているから言えることなのだろうというものがあり、正直納得がいかないものや疑問を抱くものもあった。例えば、私は研修中に自分が疑問に思ったことや確認したことを自分一人で質問に行っていた。この行為を見た先生が質問や確認事項がある場合は日本チームのリーダーを通すことを私達に注意をされ、最初は自分が疑問に思うことなのだから自分で確認をしにいった方が良いと、わざわざリーダーを介すと時間も労力もかかる、と思っていた。研修中は毎日が激動で目の前の課題に精一杯でなかなか深く考えることができなかつたが、帰国後このレポートを書きながら改めて考えてみると自分は日本チームとして参加していることの意味を理解していなかつたことに気付いた。私は人に頼る経験があまりなく、1人で何でもやってしまうと、以前言わされたことがあるが、この事がまさかここで思い起こされるとは思ってもいなかつた。今まで、1人で何でもこなすリーダーが格好良く、それがリーダーシップなのだとと思っていたが、多くの人と協力し合い、相手を信頼して任せられるところは任せのリーダーでないと続けられないし、逆に多くの人に信頼されて憧れられる存在になれるのではと思うようになった。

また、これらの事は研修を終えて帰国した後に気付いた事であるが、研修中は手話がごく自然に使われており、分からぬ時には優しく丁寧に伝わるまで伝える、分かったかどうか話し手が聞き手に確認するという姿勢が見られた。しかし、帰国してみると手話を目にすることはほとんどなくなり、研修中の環境はとても幸せな環境だったのだと実感し、手話という一つの言語をより多くの人に知ってもらいたいと思った。そして、研修中は自分から動かなければ関わりが持てない、より深い知識が得られないという環境の中、研修前半はなかなか動けないでいた私が後半になると、少しづつ自分から動けるようになり、自分から動く事を恐れず動いていく新たな自分と出会った。それから私は、この研修を通して健聴者として生きたい自分、難聴者として生きたい自分、聾者として生きたい自分の3つの自分を持っていることに気付いた。詳しく述べると、健聴者として生きるとは、声で生活をし、健聴者

の持つ文化や社会に入っていくこと、難聴者として生きるとは、声と手話の両方を使って健聴者と聾者それぞれの社会を出たり入ったりすること、聾者として生きるとは、手話を使って聾者独自の社会で生きることであると私は考えている。そして、私は aural language と sign language との両方を使って、この 3 つの文化や社会について学び、難聴というどちらの世界でも足を踏み入れることができるハーフの立場として、聾者と健聴者の間で起こる誤解を解き、社会全体を変えていきたい。